

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

非
水
古
花
譜
第十二卷

大正
10 8.10
内交

始



つはぶき

學名 *Legularia Kaempferi*, Sieb. et Zucc.

異名 あつはぶき

漢名 藜吾

科名 菊科 (Compositae)

暖地の海濱に自生する宿根草本にして地下根際より長柄の葉を簇生す。葉は圓き心臟形にして概形略フキに似たれ共其質厚く、紺紫緑色を呈し光澤あり。葉柄は長く、葉と略同色にして縮毛を有す。十月頃花茎凡そ二尺に生育し多くの枝を分ちて黄色の美しき花を開く。花は頭上花序に配列し外部のものは舌狀花を有して、中心には放射相稱なる筒狀花冠を有す。葯は基部概ね鈍圓にして基底に於て花絲に着生す。花後四又は五稜の棱柱形に、剛毛より成る冠毛を有する果實を結ぶ。

本種は花美しさに依り庭園に培養せられ、又は葉柄及花軸を取りて食用に供し葉は薬として用ひらる。

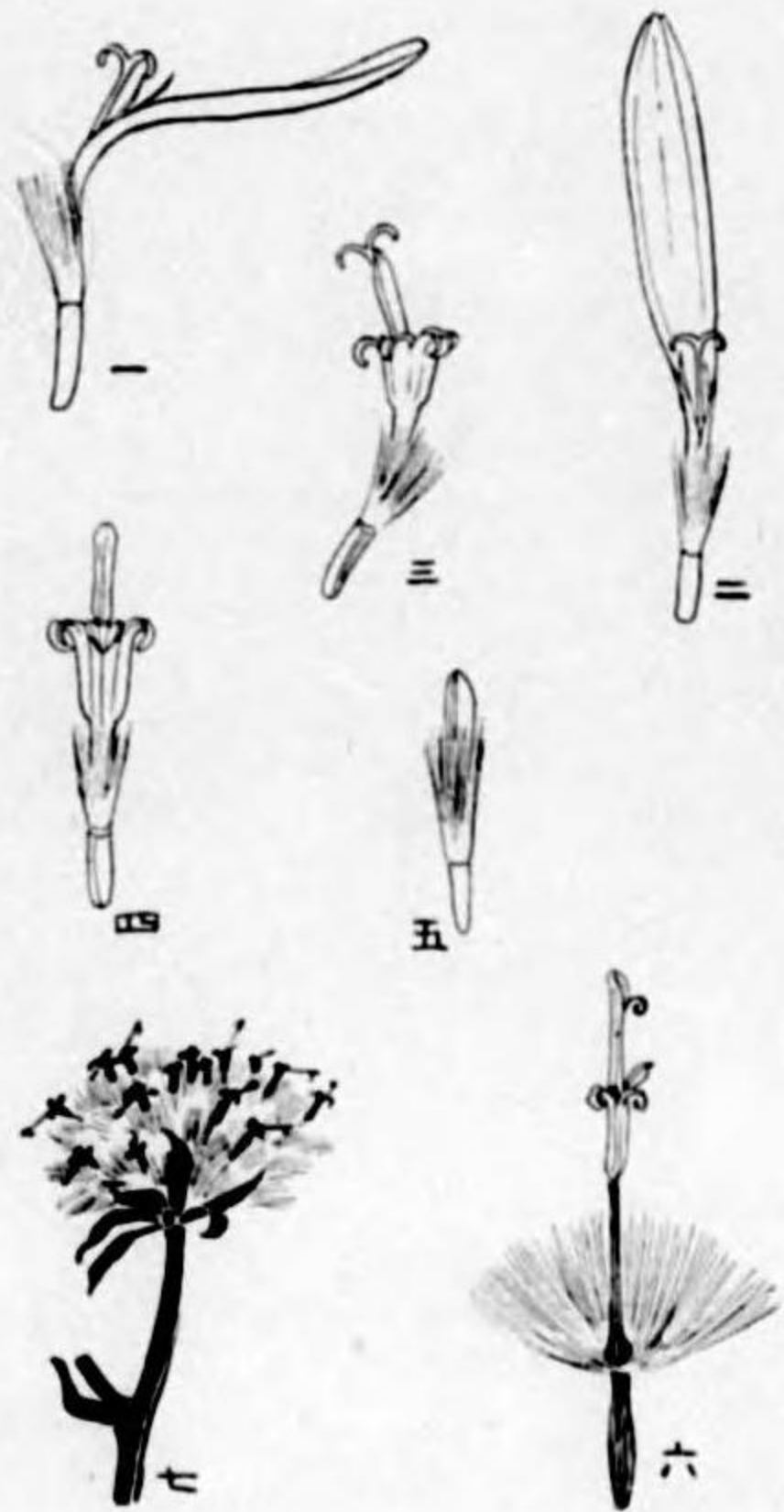
備考

- 一、本種の學名は *L. ussuriensis*, Makino を用ゆる事あり
- 一、學名の *Legularia* は *Leulin* 即ち草紐の意にして舌狀花瓣の形態より來りしものならむと思考す。

本圖 大正九年十月廿三日東京に於て寫生(自然大)

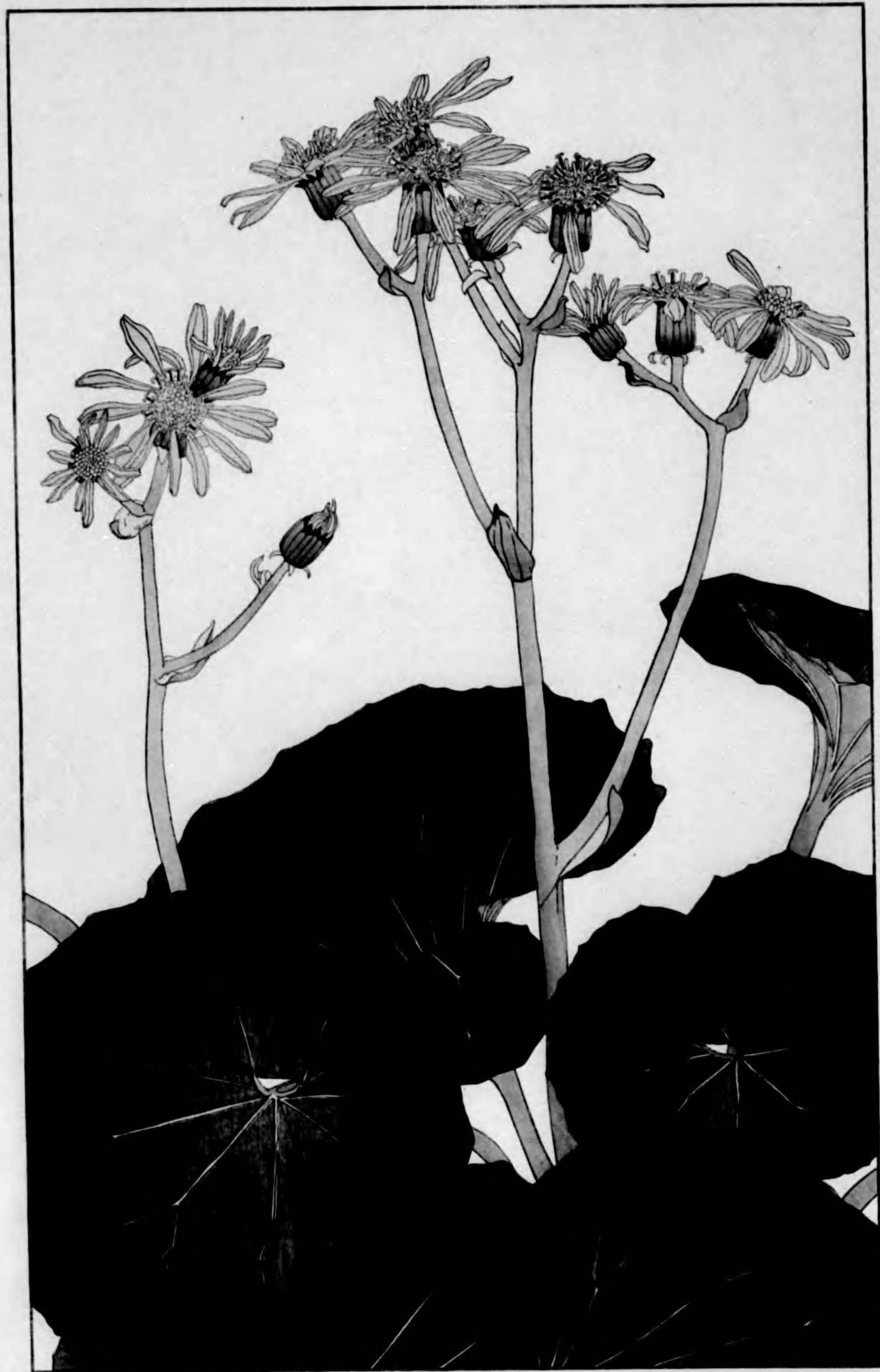
附圖 (一)(二)舌狀花、(三)(四)筒狀花、(五)同上蕾、(六)毛冠、(七)毛冠の群、(七)を除く外擴大圖毛冠は十二月十五日寫生)

寫真 大正八年十月東京に於て著者撮影



非水百花譜第十二輯目次

つはぶき (藜吾)
 ふよき (芙蓉)
 ほていあふひ (布袋葵)
 はくみぎ (萩葵)
 どくだみ (蕪)



核浦非亦齋
大倉守兵衛
田口有松
春陽堂發行
四國國庫

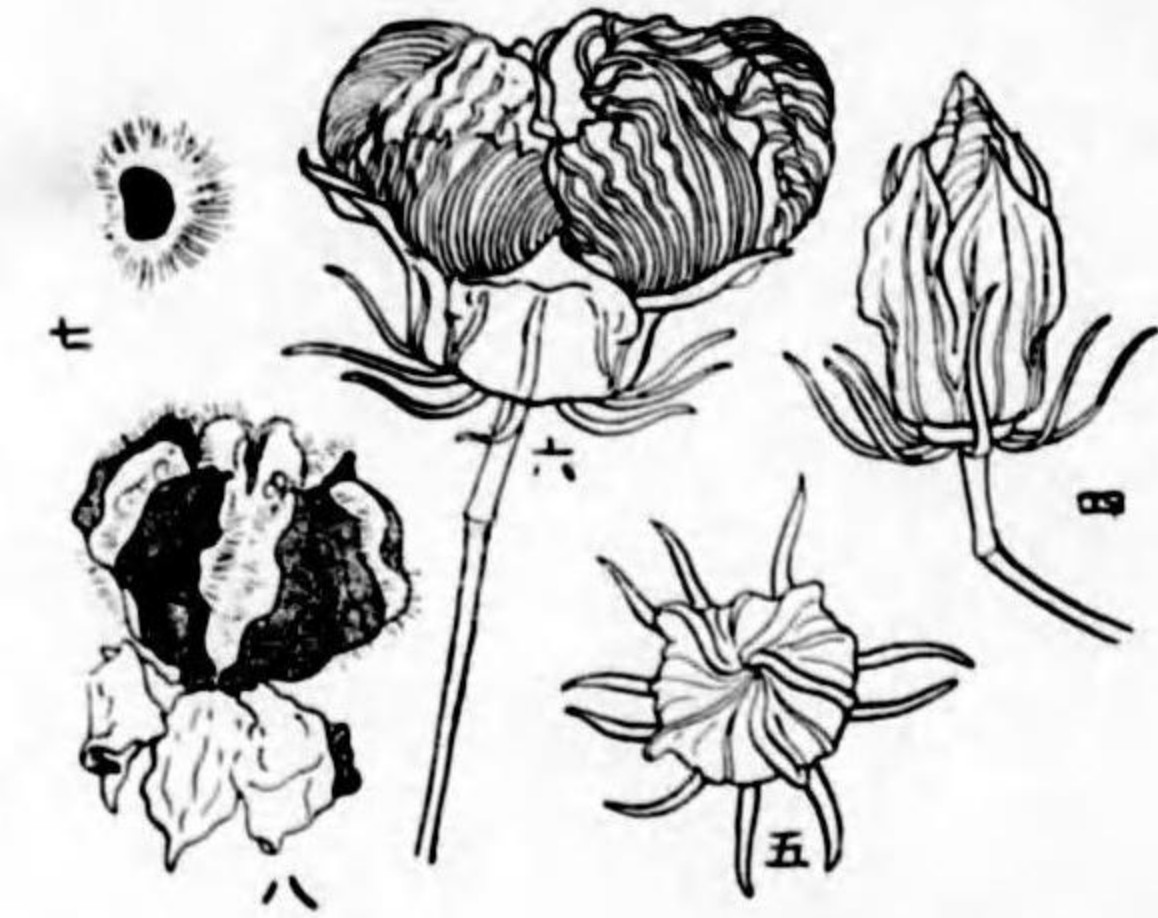
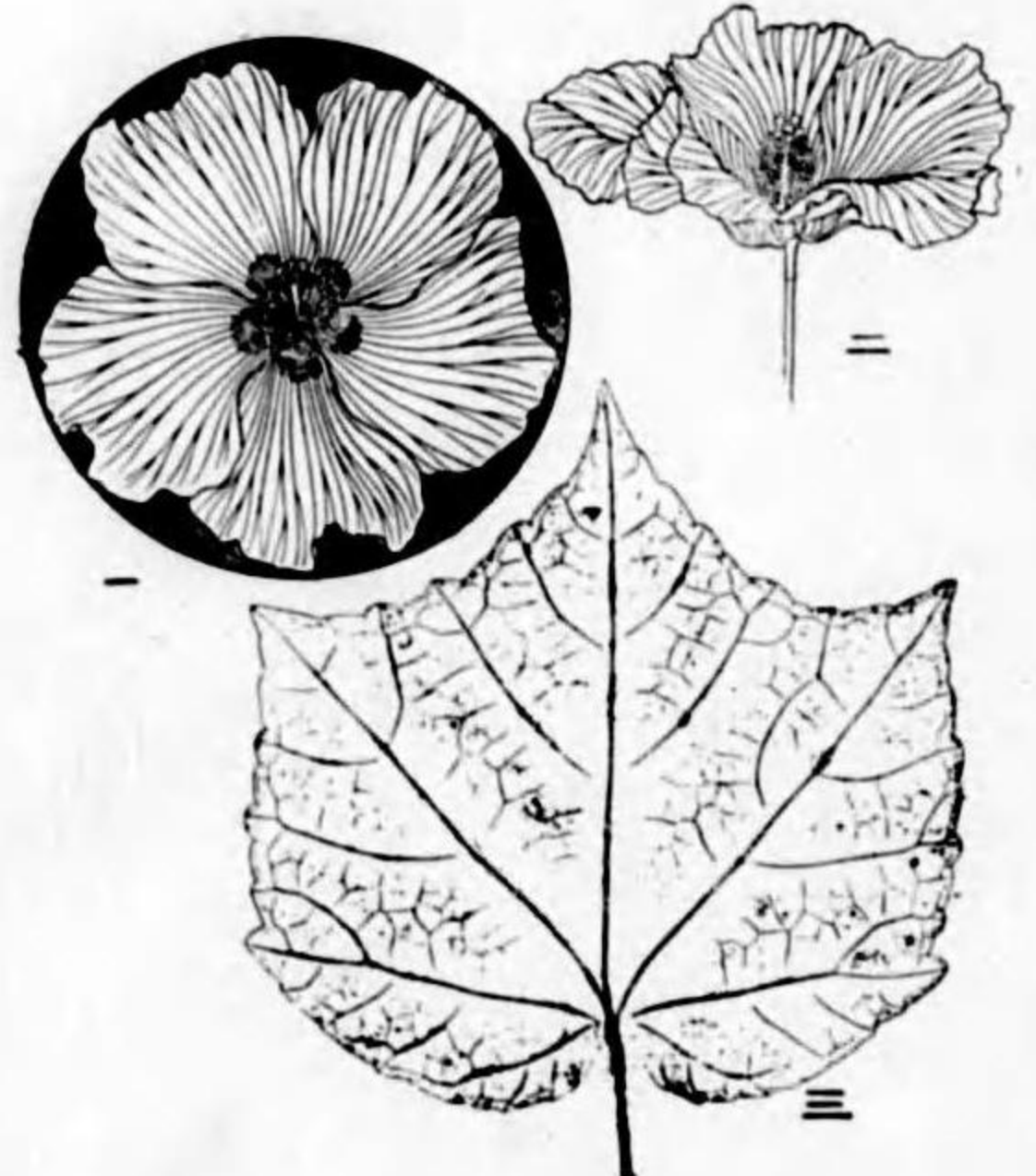
ふよう(芙蓉)

學名 *Hibiscus mutabilis*, L.
異名 もくふよう
漢名 木芙蓉、花芙蓉
科名 錦葵科 (Malvaceae)
花言葉 繊細、美麗

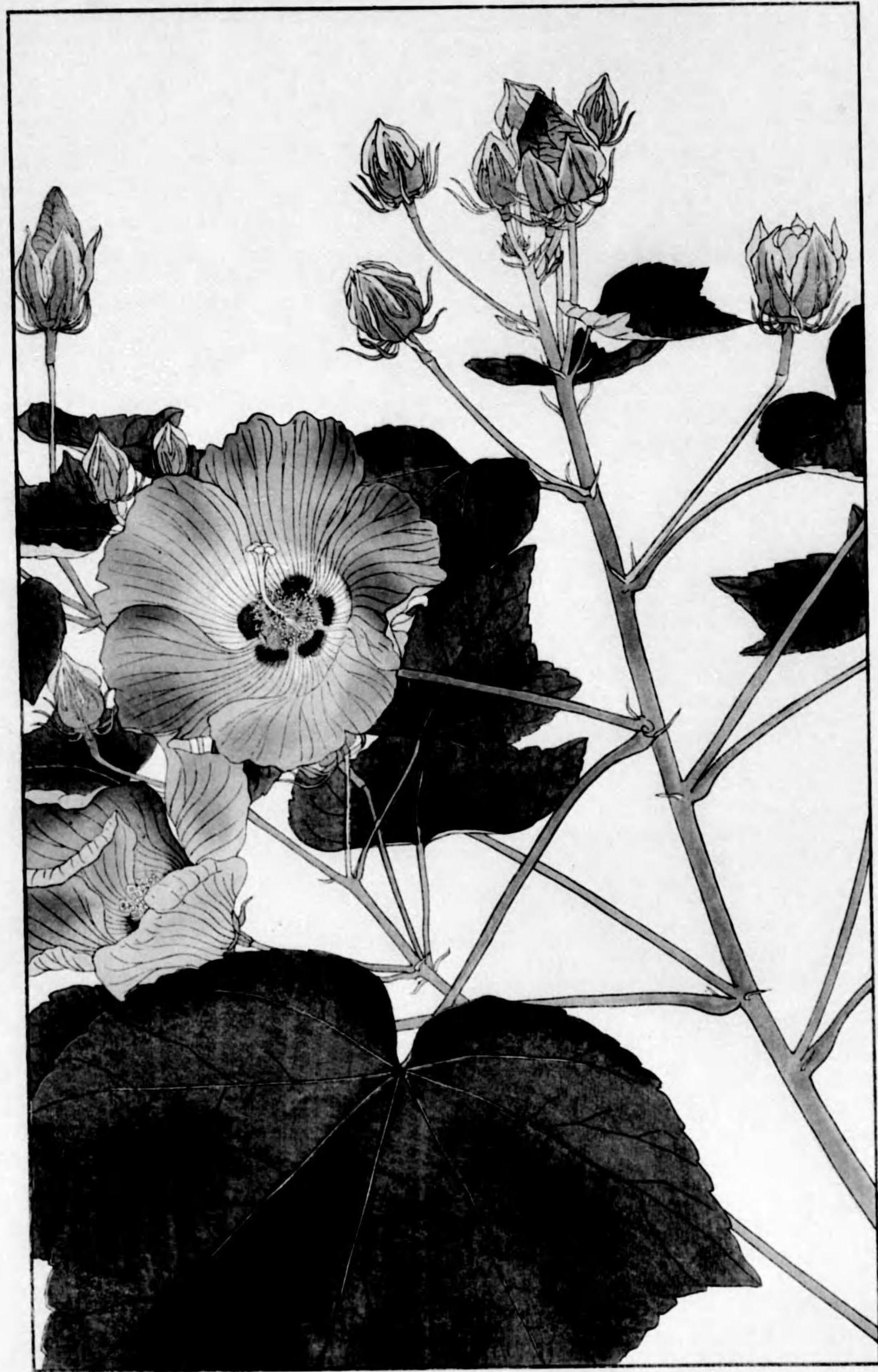
支那原産の落葉灌木にして本邦にても時に暖地の海濱に自生する事あり。然れども主として觀賞用として栽培せらるゝもの多く、罕には樹皮より纖維を採り裘を作る爲に栽培せらるゝ事あり。高さ四尺に達し、莖は皮質部及び髓部に粘液腔を有して其の外部には短毛を生ず。互生せる葉は三裂に淺裂し、基部稍心臟形をなして毛茸を生じ縁邊に鈍鋸齒あり。七月頃より秋期に渡りて美麗なる大輪花を開く。花色は淡紅を普通とすれど白色のもの及び特に色の濃きもの、又は八重咲のもの等栽培變種多し。花瓣は大形にして開花せざる間は回旋して存し萼亦融合状をなす。雄蕊は花柱を包擁して無數にあり、二輪列をなし合着して一郡束となり所謂單體雄蕊をなせり。約は一室、花粉粒は大にして著しき刺を具へ、子房は無柄にして花柱は頭狀の柱頭を有す。花後剛毛を有する稍球形の蒴果を結び、熟すれば胞背裂開をなして赤褐色の種子を出す。種子は腎臟形をなして毛茸を有し、風にも散布せらる。

備考

一、學名なる *Hibiscus* は古羅馬の詩人、パルシム (Virgil) 氏が立ち英 (Mush Malow) に名づけしものを誤りて芙蓉屬に使用せしものにして *Mutabilis* は變り易きを意味し、花期の短きにより名附けられしものならむ。



本圖 大正九年九月廿五日東京に於て寫生(自然大)
附圖 (一) 正面の花 (二) 側面の花 (三) 葉印 (四) 側面蕾
五) 蕾上 (六) 花の断面 (七) 種子 (八) 裂開せる蕾
大正九年九月廿五日東京に於て寫生(自然大)は(一)(二)(三)は他圖同(七)(八)
寫真 大正九年九月東京に於て著者撮影



芙蓉
 核浦非水書
 那美會平英術則
 北野仁
 田五菊松樹
 森陽齋發行
 四國圖書本行市京東

ほていあふひ (布袋葵)

學名 *Monoloria Kosakowii* Heg. et Maack.

異名 みづあふひ

漢名 雨久花

科名 雨久花科 (Pontederiaceae)

水田、沼地或は廢池等に生ずる一年草にして葉は短かく假單條葉をなす。低出葉は披針形にして狭長、尋常葉は圓狀心臟形をなして長き葉柄に支へられ、該葉柄は長ずるに従ひ膨大部を生じ浮遊せしむるに用ひらる。之れ空氣を含める大なる細胞間隙を有するが爲にして其の基部は低出葉と共に鞘狀をなし莖上に二列をなして着生す。

夏秋の候、葉柄の中腹より花莖を抽出し碧紫色の美しい花を圓錐花序をなして開く。花は同種花被にして花瓣狀をなし、基部は合一して多少長き管をなし留存して果實を包む。雄蕊は六個ありて花筒上に不等の高さに着生し、花絲は絲狀をなし基部擴大す。約は長形にして子房は合一せる三個の心皮より成り上位にして三室を有せり。花柱は一個にして絲狀をなす。花後、花莖萎凋屈折し葉柄に沿つて實を結ぶ。果實は三室を有する蒴果にして胚は圓柱形をなし中心に位し種多なる粉狀をなせり。

備考

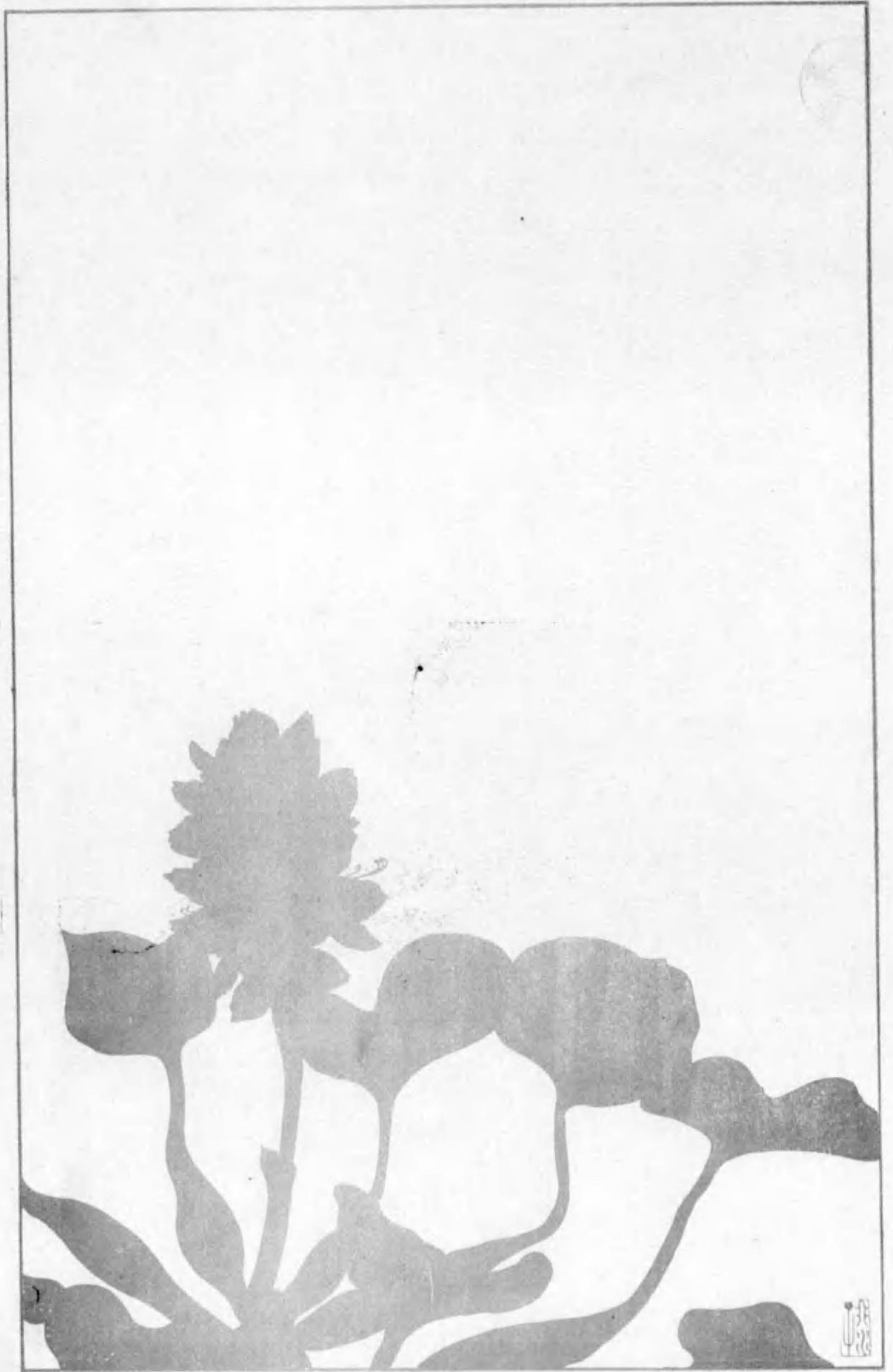
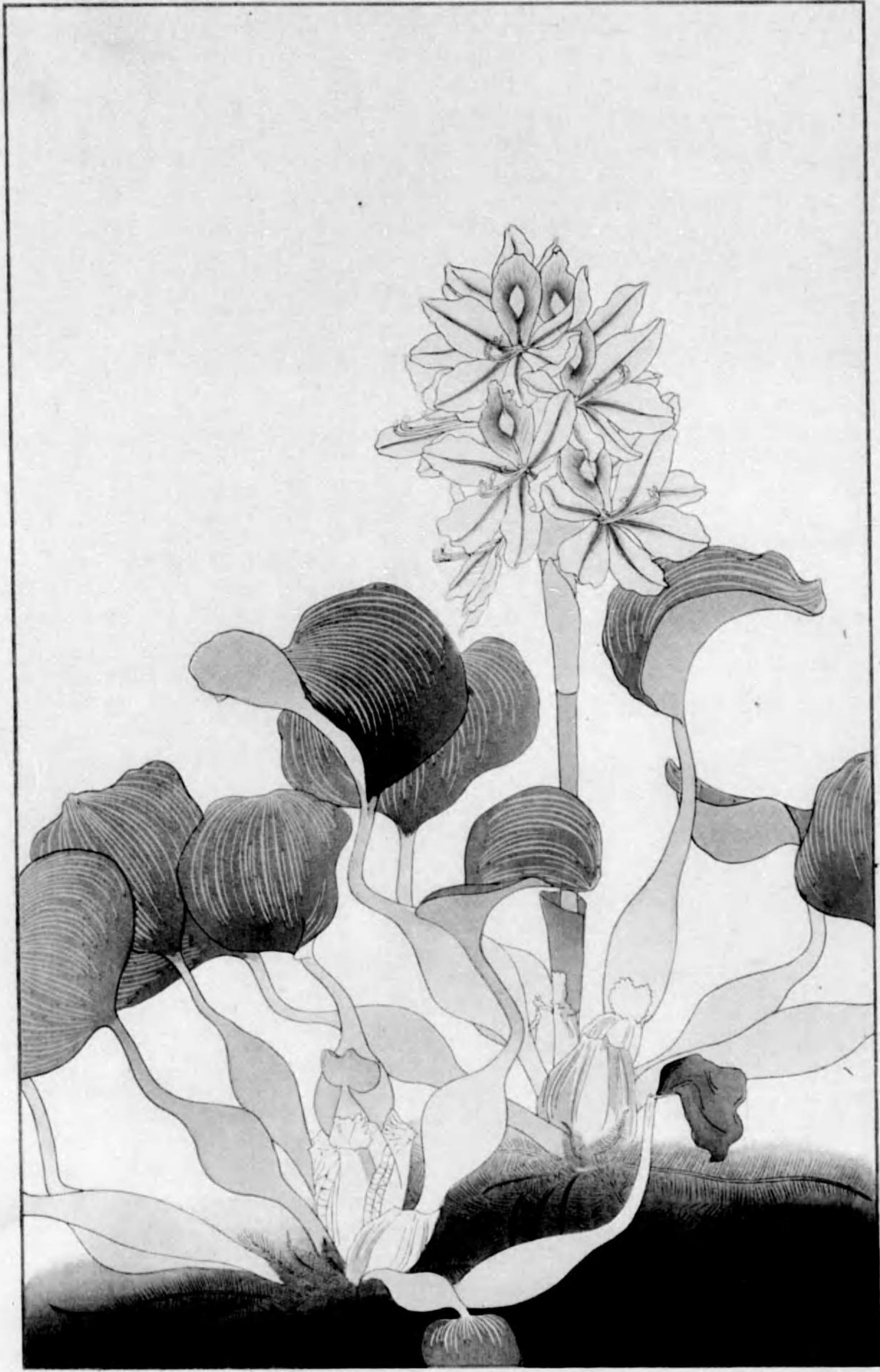
一、本種に白花の品種あり

本圖 大正九年九月十日東京に於て寫生(自然大)

附圖 (一)根(實物印寫) (二)花の正面 (三)花の側面 (全部自然大)

寫真 大正九年九月東京に於て著者撮影





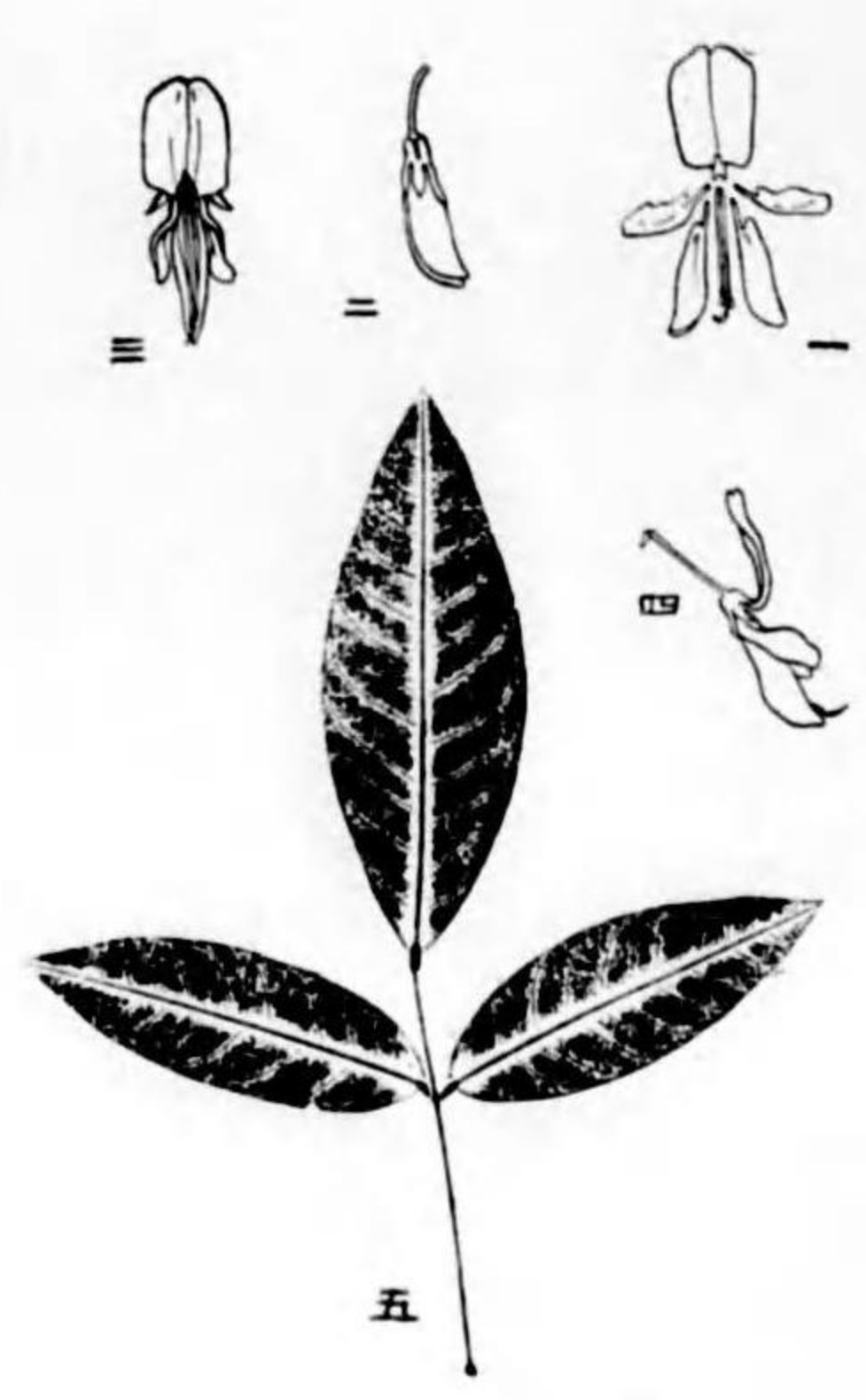
布 特許理水書
 本會生員御製
 仁徳天皇御製
 春陽堂發行
 西園誠傳本行市京東

はき(萩)

學名 *Lespedeza bicolor*, Thunb.
 異名 宮城野はき、絲萩、みだれ萩、玉萩
 漢名 胡枝子
 科名 豆科 (Leguminosae)
 花言葉 慈思

秋の七草の一として古來有名にして、東北地方は其の主なる産地なり。また各地の山野に自生せる多年生草本にして、春期地中より多数の新芽を萌發し高さ五六尺乃至七八尺に生育す。莖は細軟にして生長に伴ひて下垂し、一種の趣をなす。葉は三小葉よりなれる羽狀複葉をなし、各小葉は品字形に着生して托葉を有せず全縁なり。秋期先端に近き葉腋及び梢頭より多くの花房を生じ多数の蝶形花を綴り、長さ花穂をなして垂る。花は紅紫色を呈し、且つ他の蝶形花と異り翼瓣は略龍骨瓣と同じ長さを有す。雄蕊は十個ありて其の中旗瓣に向へる雄蕊のみ分離し他の九個は合一す。花絲は絲狀をなし、花後裂開せざる莢を結ぶ。花の麗しきにより好みて庭園に栽培せられ、従て濃紅紫色又は白色等の花を開く栽培變種をも生ぜり。又古來利用の途も種々考察せられ、東北地方の主産地に於ては飼料として頗る重用し、又葉は煎飲して茶の代用とし、幹よりは筆の軸を製せらる。

備考
 一、前掲異名他次の數種あり
 庭見草、玉水草、野守草、古枝草、秋地草、初見草、月見草、鹿鳴草、唐草
 一、學名なる「*Lespedeza*」はフロリダ州の一政治家に依り名附けられしなり。
 本圖 大正九年九月十七日東京に於て寫生(自然大)
 附圖 (一)花蕾の展開圖、(二)蕾、(三)花の正面、(四)花の側面、(五)印葉(全部自然大)
 寫真 大正九年九月東京に於て著者撮影





杉浦井水傳
大倉半兵衛
櫻田巳之吉
春陽堂發行
四道風俗本日東京

どくだみ

學名 *Houttuynia cordata*, Thunb.

異名 じふやく、ひぜんぐき、ちこくば、へぐき、しぶき、どくなへ、どくだめ、ちこくそば

漢名 蕺菜、蕺十葉

科名 三白草科 (Saururaceae)

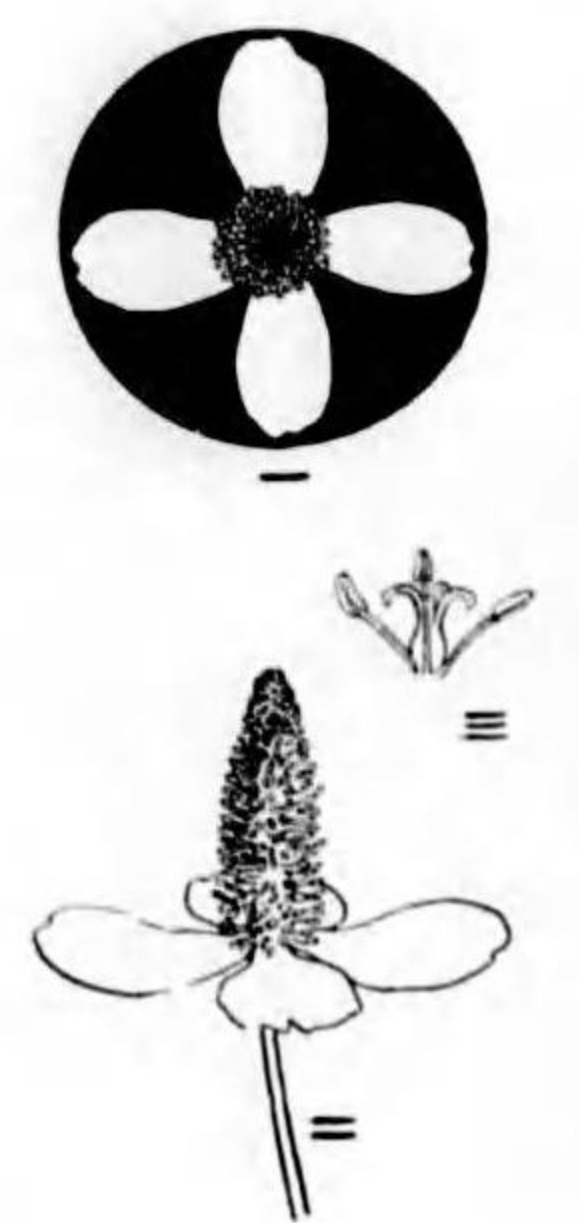
各地の陰湿地に多く自生する宿根草本にして葉は地上及地下の二種に分れ、地下莖は地下に横行して節を有し、毎節より根及芽を發す。地上莖は高さ一尺に生育し含油細胞を有せり。葉は甘藷又はツバに類せる直径一、二寸の心臟形にして全縁、裏面は紫色を帯び、長さ葉柄を有し互生す。莖葉共に惡臭を放つ。

初夏の頃より梢頭數枝を分ち花を開く。花は穗狀花序にして黄白色を呈し、花筒と房は之を缺き所謂裸花をなす。白色にして一見花筒の如く見ゆる四片は總苞にして昆蟲の誘引に缺くべからざるものなり。雄蕊三個、葯は二室にして縱裂し、一個の雄蕊は三裂せる柱頭を有す。子房は三乃至四個の心皮より成り、胚珠は直生にして二珠皮あり。胚乳は内外乳の一端に近き小囊中に藏せらる。

地上莖は冬期に至らば枯死し翌春地下莖より萌發するものにして、頗る強壯、如何に摘除するも地下莖の一節を有すればよく生育肥大し、又種子の飛散に依るもよく發芽生長す、斯く強壯なるが故に雜草として害多きも、地下莖及地上莖を掘り採り陰干となし煎じて服用すれば便通を緩にし、又血の道、寸白、子宮病、疝氣に偉大なる效ありとし盛に民間藥として用ひらる。又幼苗は菜などに調へ食用に供すと稱せらる。

備考

一、莖には特別な維管束を有し、恰も胡椒科 (*Piperaceae*) に類す。
一、學名なる *Houttuynia* はアムステルダム植物學者 Houttuyn 博士の名譽の爲に名づけられたるものにして *Cordia* は心臟形を意味す。蓋し葉形より來りしものならむ。



本圖 (大正七年六月十四日東京に於て寫生自) (一) 苞總と花狀穂をより見たる (二) 同(一) 上より見たる (三) 花一の片 (四) 葉印 (大正七年六月十四日東京に於て寫生自)

寫真 大正八年六月外日黒影攝者著

